

資料 2

平成 23 年度
公共用 水域水質測定結果
(琵琶湖・河川)

平成 24 年 7 月 9 日
滋賀県琵琶湖環境部

第1 公共用海域調査地点および調査項目

平成23年度の公共用海域における調査地点および調査項目は次のとおり。

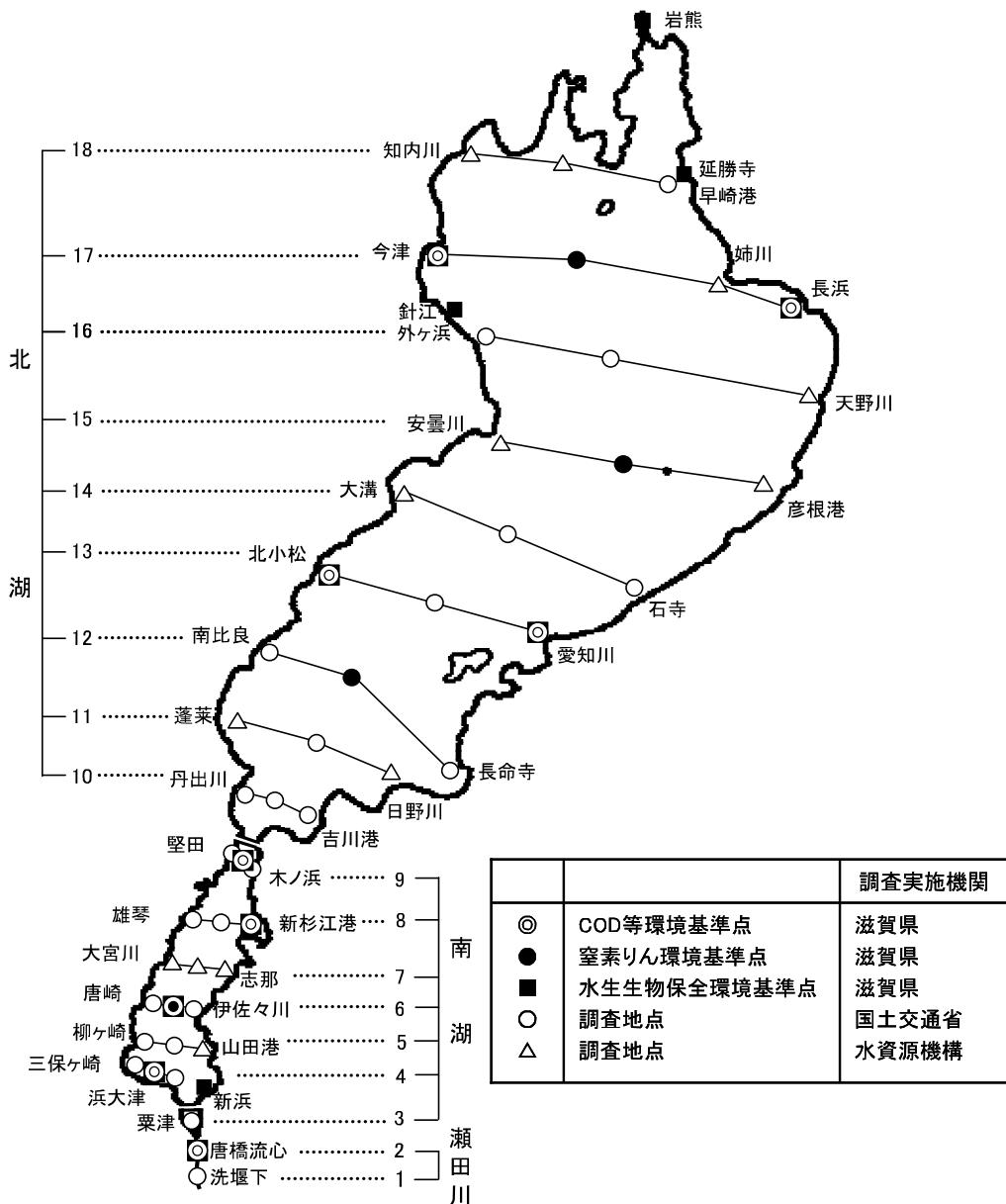
1 調査地点

(1) 琵琶湖・瀬田川

琵琶湖での水質調査は、北湖で31定点、南湖で20定点、瀬田川で2定点の合計53定点について、国土交通省、水資源機構と滋賀県が共同で実施した。

琵琶湖については、東岸部と西岸部を結ぶ琵琶湖横断の16ライン(北湖9ライン、南湖7ライン)上に東岸、中央、西岸の3定点(北湖の今津ー長浜ラインは4定点、南湖の栗津ー瀬田ラインは中央の1定点のみ)、湖岸4定点(北湖3定点、南湖1点)で実施した。瀬田川については唐橋および洗堰下流の各流心の2定点で実施した。

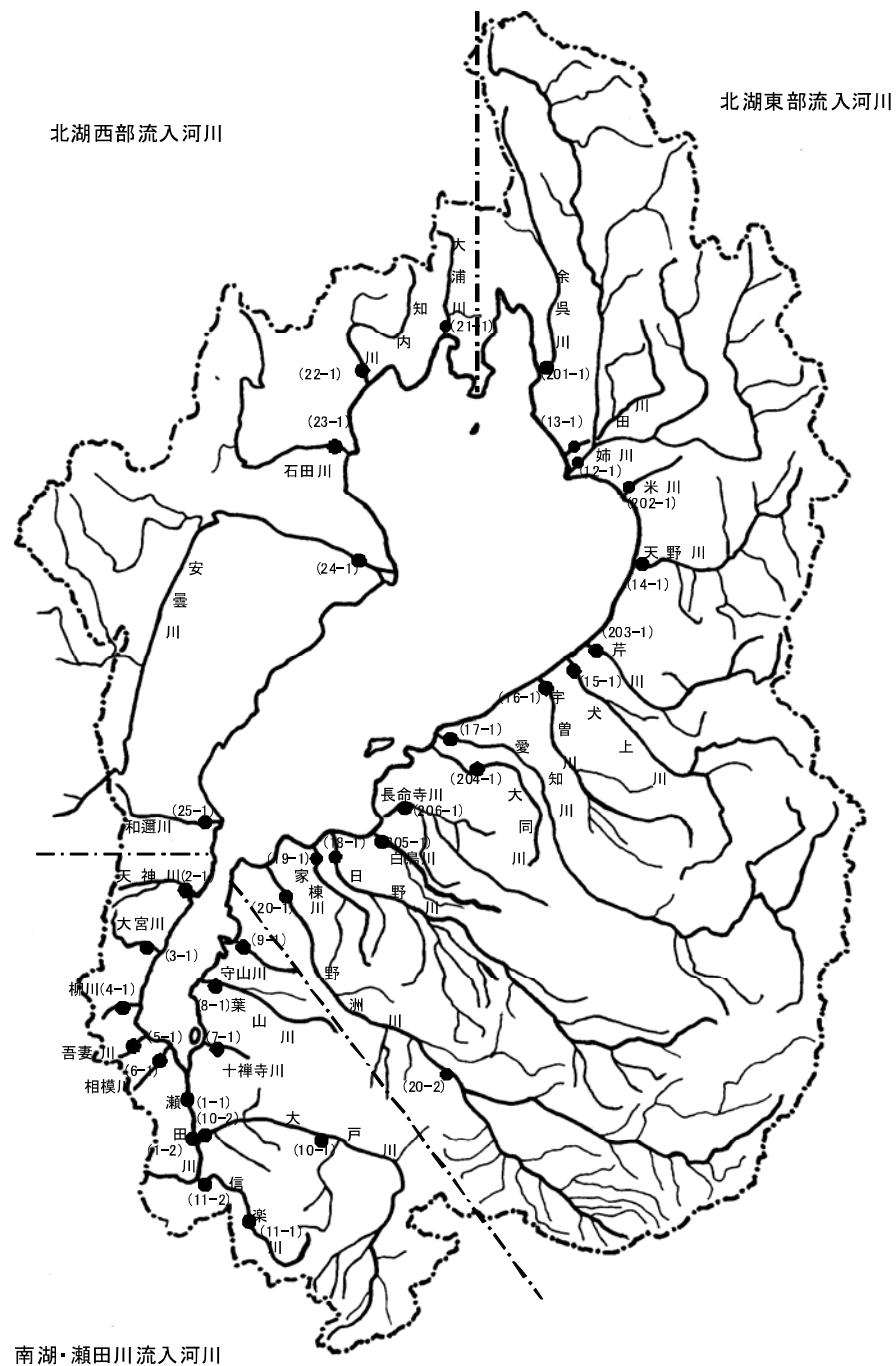
採水は表層(水面下0.5m)を採水した。



琵琶湖・瀬田川水質測定地点図

(2) 河川

河川の水質調査は、環境基準点が設定されている 24 河川(瀬田川は琵琶湖として報告のため、除外)と設定されていない 6 河川の合計 30 河川について、国土交通省、大津市と滋賀県が共同で実施した。



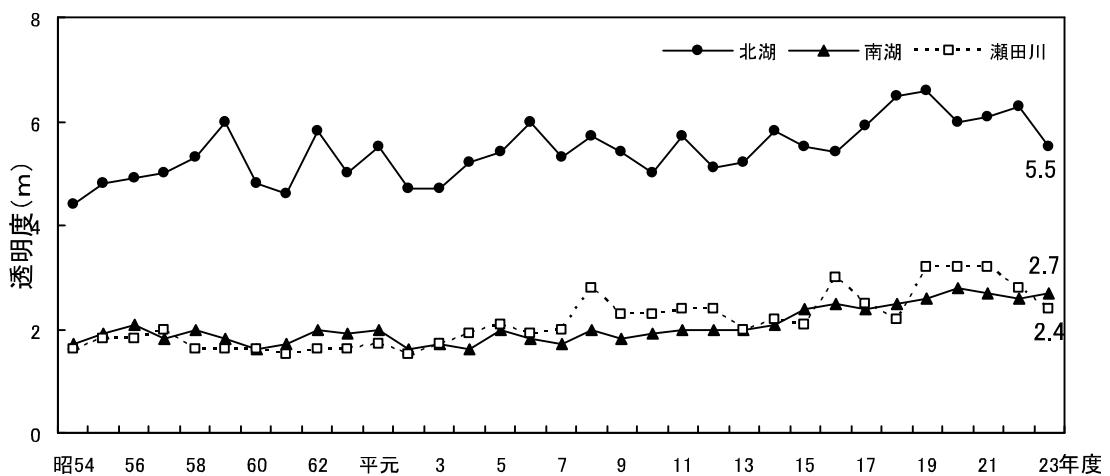
河川水質測定地点図

2 主要水質項目の経年変化

(1) 透明度

北湖の透明度は 5.5m と前年度より少し低かった。

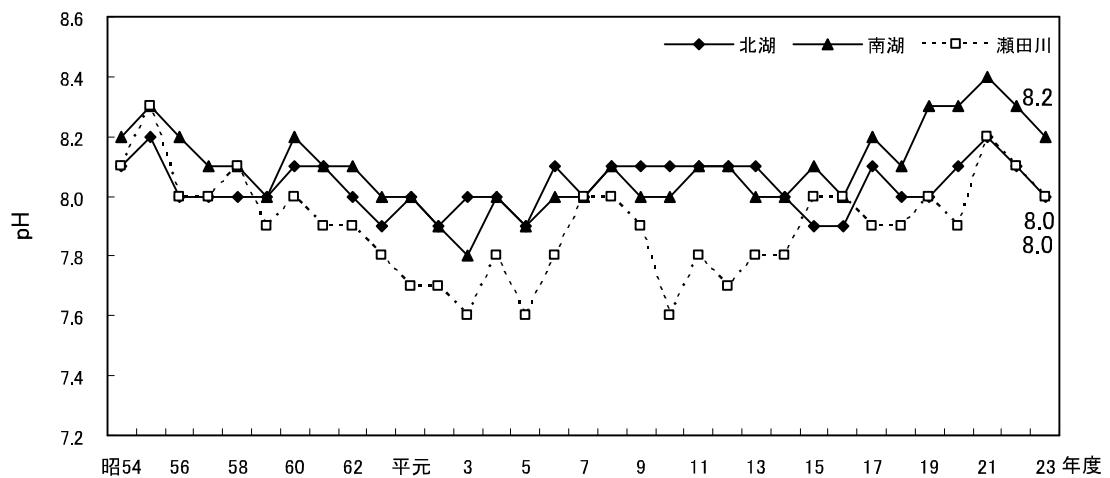
南湖の透明度は 2.7m と前年度および過年度並であった。平成 7 年度以降、上昇傾向にある。



(2) pH

北湖の pH は 8.0 と前年度より少し低かった。平成 16 年度以降、上昇傾向にある。

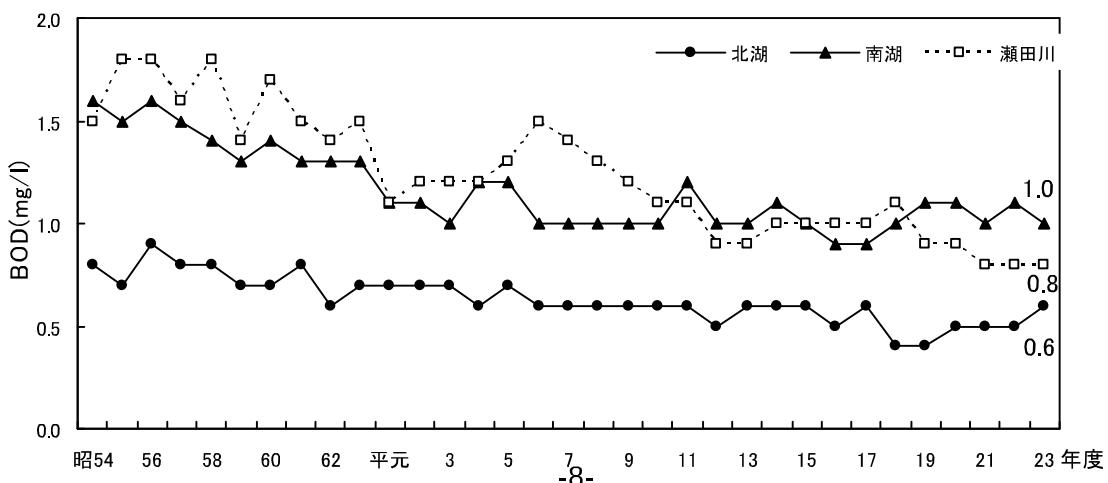
南湖の pH は 8.2 と前年度および過年度並であった。平成 16 年度以降、上昇傾向にある。



(3) BOD

北湖の BOD は 0.6mg/l と前年度および過年度より少し高かったが、報告下限値(0.5mg/l)付近で推移している。

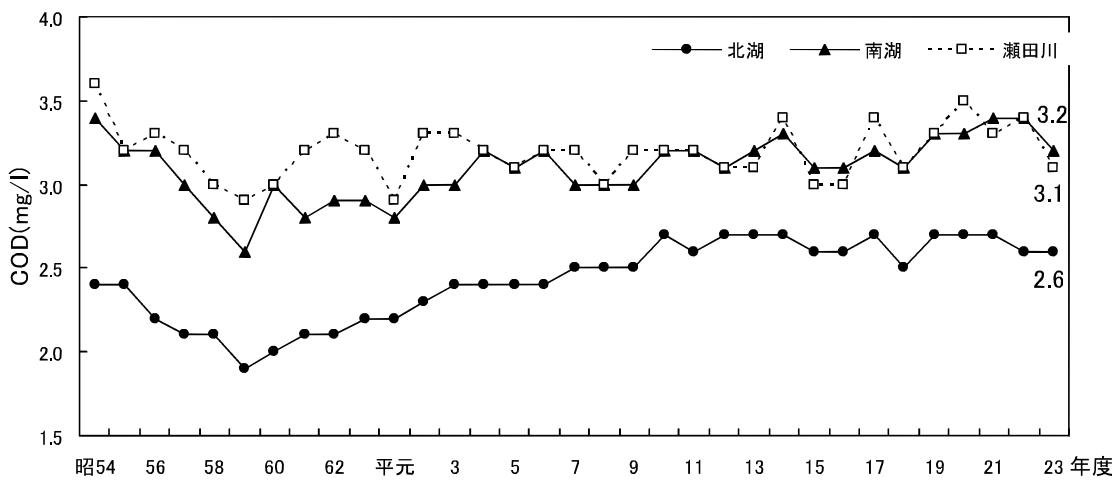
南湖の BOD は 1.0mg/l と前年度より少し低かった。平成元年度以降、横ばい傾向にある。



(4) COD

北湖の COD は 2.6mg/l と前年度および過年度並であった。平成 10 年度以降、横ばい傾向にある。

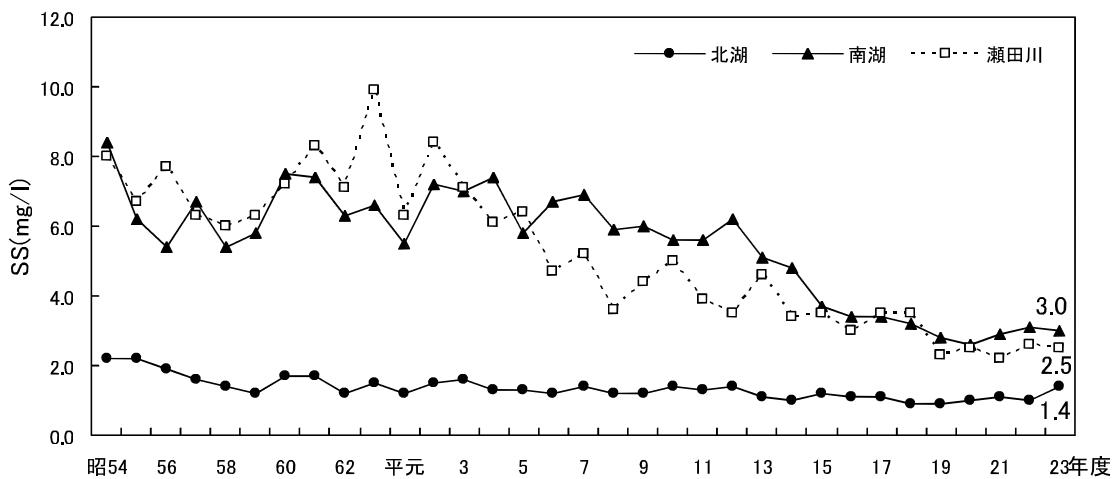
南湖の COD は 3.2mg/l と前年度より少し低かった。



(5) SS

北湖の SS は 1.4mg/l と前年度および過年度よりかなり高かった。平成 3 年度以降、減少傾向にある。

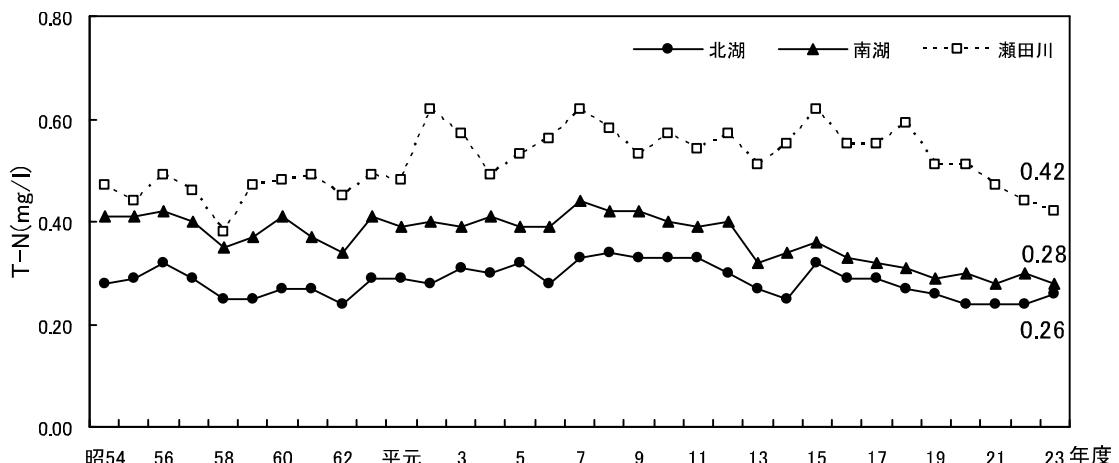
南湖の SS は 3.0mg/l と前年度および過年度並であった。平成 7 年度以降、減少傾向にある。



(6) 全窒素 (T-N)

北湖の T-N は 0.26mg/l と前年度および過年度並であった。平成 15 年度以降、減少傾向にある。

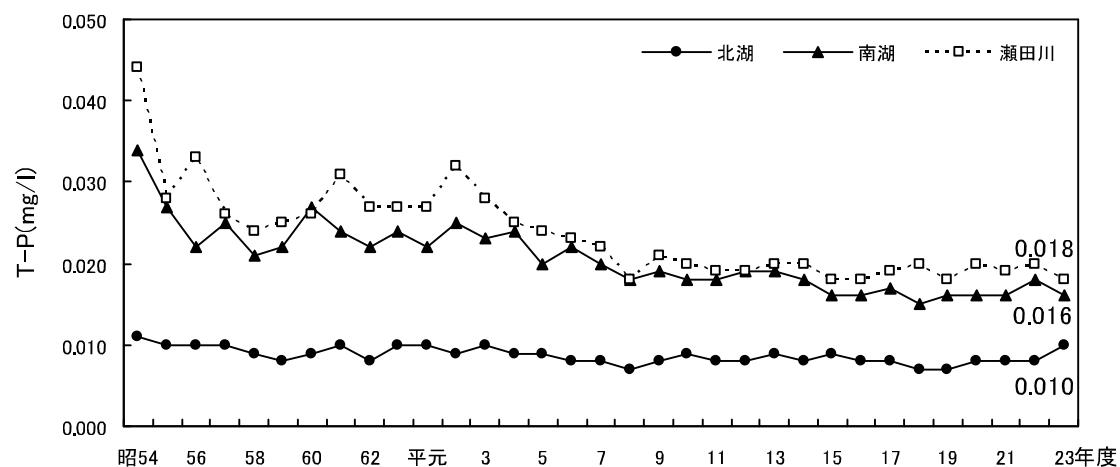
南湖の T-N は 0.28mg/l と前年度並であった。平成 15 年度以降、減少傾向にある。



(7) 全りん (T-P)

北湖の T-P は 0.010mg/l と、前年度および過年度より高かった。

南湖の T-P は 0.016mg/l と、前年度より少し低かった。昭和 54 年度以降、減少傾向にある。

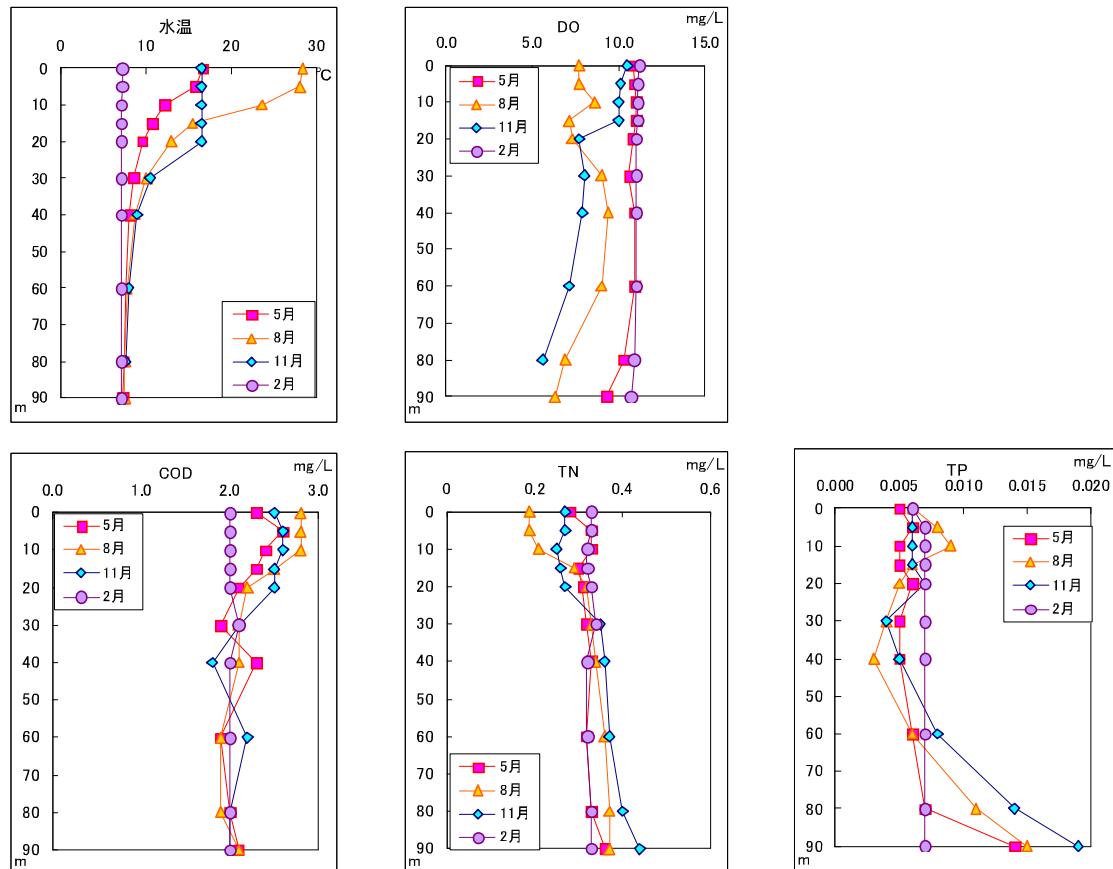


(8) 水深別水質調査結果

①今津沖中央（水深約 90m）における水温、溶存酸素濃度（DO）、COD、全窒素、全りんの水深別の季節変化（平成 23 年度）

5 月には、表層の水温上昇により水温躍層が形成された。これ以降、表層では植物プランクトンが窒素を利用して有機物を生産し、それらが沈降することにより、表層の窒素が減少する。8 月には、深層部で表層から沈降した粒子の分解に溶存酸素が消費されるほか、窒素やりんの濃度が上昇する。

気温の低下とともに、表層水が冷却され重くなることによって循環が起こり、深層部へ酸素が供給される。2 月には、表層から湖底まで湖水が循環し、各水質項目も表層から深層部まで均一化しており、例年とほぼ同様の傾向が見られる。



②今津沖中央（水深約 90m）におけるC O D、全窒素、全りんの水深別の経年変化

CODについては、表層、中層および底層（湖底直上1m）とも上昇傾向にあったが、平成10年度以降は横ばいの傾向にある。

全窒素については、全層で上昇傾向にあったが、近年は減少傾向が見られる。

全りんについては、表層と中層では減少から横ばい傾向で推移しており、底層（湖底直上1m）では変動が大きく一定の傾向は見られない。

